

正誤表

『グローバル・コミュニケーション研究』第4号（特別号）におきまして、以下の箇所に誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
24頁4行目	気づいているのが	気づいているのだが
24頁下から9行目	悩まれる	悩まされる

(2017年5月)

多文化社会への移住による広東語話者の 言語管理

—三世代のオーストラリア香港系移民の
事例からの一考察—

サウクエン・ファン

Language Management among Cantonese Speakers as a result of Migrating to a Multicultural Society: A Case Study of Australian Hong Kong Migrants of Three Generations

Sau Kuen FAN

This paper aims to address the problem of language management among migrants whose native language is beyond the target of language planning and / or related language policies in a multicultural society. This observation is based on the fact that in the case of Cantonese speaking Hong Kong migrants in Australia, for example, in addition to managing the host language (e.g. acquisition of English literacy) and their community language (e.g. maintenance of Cantonese as heritage language), they also face problems for the management of the officially recognized Chinese variety due to the influx of migrants from Mainland China in recent years. On the basis of official statistics data provided by the Australia government and language biographies of three generations in a Cantonese speaking Hong Kong migrant family, the study suggests that informants in all three generations confronted significant problems regarding the use of spoken Chinese (i.e. Mandarin) and written Chinese (i.e. simplified characters) even though they intended to migrate to an English speaking country.

キーワード：多文化社会、言語管理、席次計画、広東語話者、オーストラリア

1. はじめに

オーストラリアは、多文化社会建設から30年以上を経て、2016年現在でオーストラリア総人口の四分の一が海外生まれという名実ともに多文化社会に至った(Australian Bureau of Statistics, 2016)。オーストラリア移民の多文化社会は、当時の言語政策(e.g. lo Bianco, 1987)が想定していた英語、英語以外の九言語、コミュニティ言語の枠組では収まりきれない多様性をも生み出している。それはオーストラリアで生活しながらも、常に異なる言語コミュニティを行き来する多言語使用者の存在である。

周知のようにオーストラリア連邦政府の多文化主義政策の取り組みが始まった¹⁾直後の1980年代から、移民の言語問題は注目され始め、現在まで多くの研究成果が蓄積されてきた。Clyneの一連の統計調査(1985; 1991)を皮切りに、いわゆる「コミュニティ言語(community languages)」についての研究が盛んになっていったが、さらに言語についての国家政策の議論(e.g. lo Bianco, 1987; Dawkins, 1990)やLOTEs(Languages other than English)²⁾に対する実態調査(e.g. Marriottほか, 1994)など、言語面から多文化主義政策を検証し、具体化していったと言える³⁾。de Bot & Clyne(1994)、Chiswick, Lee & Miller(2004)、Yagmur(2004)など移民の言語使用に対する縦断的研究も多くなされており、新たに継承語(heritage language)教育の課題を洗い出すことにも成功している。

しかし、これらの研究は、多文化主義がその誕生のときに内包していた「国家=国民=言語」(例、「日本=日本人=日本語」という近代的な言語イデオロギーの制約を受けており、その結果、移民コミュニティにおける言語維持(language maintenance)と国家の公用語(英語)リテラシーの問題だけが注目されてきたとも言えるだろう。

本研究は、以上のような問題意識のもと、多言語社会において、言語計画及びそれに伴う言語政策の対象から外れた言語を母語とする移民の多言語管理を研究する意義について考察することを目的とする。特に中国南部出身⁴⁾のオールドカマーによって長く築かれてきた広東語コミュニティに参加してきた香港系移民が、近年中国本土から移住する北京語話者の急増を受けて、現在直面することとなった言語問題の事例を取り上げる。論

文の前半では、オーストラリア香港系移民の現状を概観すると同時に、オーストラリアに移住する前の香港出身広東語話者の言語事情を簡単に紹介する。後半は、1980年代の半ばに香港からオーストラリアに留学したのち、1997年の中国返還の直前に移住した当時20代後半の男性(F)を中心に、呼び寄せで移住した彼の祖父(G)と、オーストラリアで生まれた子(S)の三世代の香港系移民家族の事例を通して、彼らの多言語に対する管理を分析する。

2. 統計から見るオーストラリアの香港系移民の実態

オーストラリアでは、建国直後の1911年以来、Australian Bureau of Statistics (ABS、オーストラリア統計局)によって5年ごとに「人口および住居調査」(The Census of Population and Housing)という国勢調査を実施している。20世紀初頭の香港は小さい漁村にすぎなかったが、オーストラリアと同じようにイギリスの植民地であったためか、もしくはイギリス人が香港経由でオーストラリアに移住するケースがあったためか、香港出身者に対する統計記録がオーストラリアの国勢調査ができる前から残されている。たとえば、ビクトリア州のMuseum Victoria Australiaが国勢調査のデータに基づいて整理した「Origins: Immigrant communities in Victoria」という資料からは、香港出身者の人口は、1871年63人、1881年20人、1891年7人、1901年50人、1911年78人であったことがわかる。

香港生まれのオーストラリア人(Hong Kong born Australian)は、ほかの移民と同じように、香港で生まれ、のちオーストラリアの市民権(Australian citizenship)を取得した移民の一世である。彼らの多くは、オーストラリアのパスポートを所持しながら、香港の市民権や、British National Overseasなどの国籍を同時に所有している二重国籍者でもある。

周知のように、1980年代の半ばから1990年代にかけての香港人の海外移住ブームは1997年にイギリスから中華人民共和国への返還による主権移譲と切っても切れない関係にある。この移住ブームに拍車をかけたのが、中華人民共和国とイギリスの間で合意された1984年12月19日の「中英共同声明」の発表と、1989年6月4日に起きた「天安門事件」を挙げる

ことができる。海外移住先で人気だったのはイギリス以外に、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどイギリス連邦の英語圏の国であった。正確な統計はないものの、当時570万前後の香港の人口に対して、毎年数万人の規模で海外に移住をしていたと言われている⁵⁾。

香港系移民の急増はオーストラリア統計局の国勢調査のデータにもはっきりと反映されている。一例を挙げると、1986年の統計では、新しく受け入れた定住者 (settlers) の5.6%が香港出身だったのに対して、5年後の1991年の統計では12.4%に倍増し、イギリス、アイルランドに次いで、オーストラリアにとって三番目に大きな受け入れ移民グループだった (Australian Social Trends, 1994)。また、別な政府機関の資料では、1984年から1996年までの間に、オーストラリアは75,480人も香港人を定住者として受け入れていた (Australia Government, Department of Social Services)。

2011年の国勢調査では、香港生まれのオーストラリア人は74,955人⁶⁾となり、全人口⁷⁾の約0.3%を占めていた。居住地域別に見ると、ニューサウスウェールズ州が38,568人で最も多く、その次がビクトリア州18,204人、次いでクイーンズランド州8,729人となっている。オーストラリアの移民社会に関する先行研究でよく指摘されているように、オーストラリアの香港系移民はほかの移民グループの多くと同じように、都市部に集中している一方で、いわゆる ghettos のような少数民族居住地区が見られず、比較的に分散して居住する傾向が見られる (例、Burnley, 1999; Jupp, 2001)。Jupp (2001:221-222) では、オーストラリア香港系移民のそのほかの特徴として次のように要約されている。

- (1) 中流階級が居住する近郊 (suburb) で目立つ存在である。
- (2) 都市の中心部 (city centre) や中華街 (China town) から離れて住むことが多い。
- (3) 移民カテゴリーにおいては、いわゆる呼び寄せ (family reunion) ではなく、技術移民とビジネス移民が多い。
- (4) 全体として英語能力が高い (国勢調査の回答者の中に75%は「speak very well」または「well」との自己評価をしている)。

多文化社会への移住による広東語話者の言語管理

ビクトリア州の香港系移民に焦点をあてると、さらに詳しいデータを入力することができる。上で紹介した Museum Victoria Australia の統計資料をもとに、本研究の対象となる三世代と関係する 1986 年、1996 年と 2011 年の 3 回の国勢調査の概要を次の表 1 にまとめた。表 1 にあるように、1986 年の香港系移民の平均年齢は 30 歳であったのに対して、1996 年では 33 歳、2011 年では 42 歳と推移し、高齢化が進んでいることがわかる。また、人口の方は、1986 年から 1996 年の 10 年の間に香港の中国返還に伴い、2 倍以上増加したものの、その後増加は緩やかになっている。家庭での使用言語は広東語が圧倒的に多い。ただし、1986 年の統計資料では、当時香港系移民の受け入れ歴がまだ浅かったのか、「Cantonese」（広東語）ではなく、「Chinese languages」（諸中国語）と表現されていた点が興味深い。

表 1 ビクトリア州香港系移民の概要

国勢調査年	1986 年		1996 年		2011 年	
平均年齢	30 歳		33 歳		42 歳	
人口	6119 人		15377 人		18069 人	
男女比	50% / 50%		49% / 51%		48% / 52%	
家庭言語	諸中国語	5,290	広東語	13,423	広東語	15,156
	英語	834	英語	1,199	英語	1,998
	ベトナム語	65	ベトナム語	400	ベトナム語	421
	指定なし	41	中国語	290	北京語	342
	ポルトガル語	26	北京語	138	指定なし	54
	ゲール語	19	指定なし	58	ネパール語	33
	イタリア語	14	他の言語	24	日本語	25
	ウルドゥ語	13	日本語	12	ドイツ語	14

出典： Origins: Immigrant Communities in Victoria
<http://museumvictoria.com.au/origins/history.aspx?pid=24>

2011 年現在のメルボルン在住の香港系移民は、ホワイトカラーが多く、

専門職(3,966人)と行政職(1,330人)が半数以上を占めていた⁸⁾。2001年にメルボルン市長に選出され、2008年まで2期の任期を終えたジョン・ソ氏(John So、中国語表記:蘇震西)は香港生まれのオーストラリア移民だった。

3. 現場から見るオーストラリア香港系移民の実態

1990年代に入ってからオーストラリア香港系移民を対象とした実態調査が増えている。例えば、香港大学の社会学者黄紹倫(S. L. Wong)は“Roaming yuppies”を題にして、当時の香港市民はなぜ香港を離れたのか、なぜオーストラリアに移住したいのか、彼らの移住によってオーストラリア社会にどのような影響を与えたのか、などについて社会学的な分析を行った(Wong, 1994)。また、Pe-Puaほか(1996)では、オーストラリアの政府機関の「移住、多文化、人口研究所」(Bureau of Immigration, Multicultural and Population Research)のチームが行ったシドニー在住の60家庭のインタビューをもとに、グローバル社会を特徴づけるトランスナショナルリティー(transnationality)の視点から香港とオーストラリアを行き来する移民たちのライフサイクルを考察した。さらにMar(2002)は、シドニー在住の香港系移民に焦点を当て、香港とシドニーの2都市でエスノグラフィー的なフィールドワークを行っている。ここでは、彼らの移動によって創造される物理的な都市居住空間(inhabiting urban space)は、使用言語、会話相手の選択、生活必需品の選択などの社会的・文化的な要素と織り交ぜられ、個々の移民の主観的な移民の「居場所」(migrant “place”)の形成につながっていることが指摘されている。

ここでは、オーストラリア香港系移民向けのニュースメディア、テレビ・チャンネル、飲茶レストランの3つの角度から、彼らの言語使用の一面を紹介したいと思う。

(1) 香港系移民向けのニュースメディア

オーストラリア香港系移民向けの重要なニュースメディアとして、紙媒体の「星島日報」とインターネットサイトの「星島聯網」がある。親会社

の星島新聞集団は1938年に香港で中国語繁体字の新聞を創刊した。その後、オーストラリア、ヨーロッパ、アメリカ(3都市)とカナダ(2都市)の地方版も発行し、広く世界中の華僑を読者層として持つ。地元香港版も、海外地方版も、新聞記事は基本的に現代漢語と呼ばれる標準中国語(詳細は次節参照のこと)で作成され、広東語話者である香港出身の読者は心の中で広東語(またはほかの方言)で読み解くことになっている。

ただし、ここで1つだけ注意すべきなのは、香港系移民向けのニュースメディアでは標準中国語が使われているが、特にオーストラリアの地名や人名といった固有名詞の訳語は基本的に香港広東語の発音に基づいているということである。例えば、筆者が2016年1月21日閲覧した星島聯網の新聞記事には次のような表現が使われていた。

例1: (インターネットサイト星島聯網の新聞記事)

社區: 2016年澳洲國慶日慶典 雪梨港海陸空多項活動

この記事の中に、シドニー(英語: Sydney)の地名は中国本土で使われている「悉尼」(汉语拼音⁹⁾: xini)ではなく、広東語の発音に基づいた「雪梨」(国際音標記号¹⁰⁾: [sytlei])で翻訳されている(下線部分)。

また、オーストラリアでは政府による中国語使用の統制がないために、香港では非標準とされている広東語書き言葉の使用が特に広告や、コミュニティ欄でしばしば見られる。

(2) 香港系移民向けのテレビチャンネル

香港を拠点としている「電視廣播(國際)有限公司」の子会社の「電視廣播(澳洲)有限公司」(略:「澳洲TVB」または「TVB Australia」というテレビチャンネルは、オーストラリアでは2000年5月に放送が開始された。番組制作以外に、広告制作、各種の大型イベントも開催される。香港の本部と同じように、音声は広東語で放送し(つまり、話し言葉は広東語使用)、字幕や映像などの視覚情報は標準中国語を使用する(つまり、書き言葉は広東語を使用しない)。文字表記は中国本土の簡体字ではなく、中華人民共和国が成立する前から使われてきた繁体字を用いる。たとえば、TVB Australiaでは、主催する「ミスオーストラリア華僑2016」の宣伝の

ために、テレビのホームページでは「2016 澳洲華裔小姐競選」のように繁体字を使っていた(下線部分)。

(3) 香港系移民向けの飲茶レストラン

広東省に出自をもつことの多い香港人には朝、中国茶を飲みながら、点心を食べるという「飲茶」の習慣がある。イギリス植民地の時代においても飲茶文化はますます発展し、レストランのレイアウトや点心の種類と言ったハード面だけでなく、地元の広東語を使ったお茶・点心の名称や調理法、注文に関する用語など言語関連のソフト面も確立してきた。

たとえば、

- A) お茶の名前: 菊普 ([gukbou]) = 菊の花とプーアル茶のブレンドしたお茶
- B) 点心の名前: 蛋撻 ([daantaat]) = エッグタルト
- C) 調理法: 焗 ([guk]) = オープン調理
- D) 注文: 唔該 ([mgoi]) = すみません、お願いします、埋單 ([maai daan]) = お勘定

飲茶文化は、香港人の大量移民によって、世界に広がったと言っても過言ではない。そもそも、「飲茶」の英語訳「yumcha」も、日本語訳「ヤムチャ」も広東語に基づいている。週末のランチとして家族と飲茶レストランに行って、レストランの入り口に置いてある無料の星島日報を手にして、ゆっくりとお茶を飲みながら、広東語でおしゃべりをするのが、よく目にするオーストラリア香港系移民の生活風景の1コマとなっている。

4. 香港人の言語事情

香港は1997年7月1日に約150年ぶりにイギリスから中華人民共和国に返還され、政治的にイギリスの植民地から中華人民共和国の特別行政区に変わったが、「香港特別行政区基本法」(略: 基本法、英語: Basic Law of the Hong Kong Special Administrative Region)の下、高度な自治、市場経済、言論の自由、独自の通貨や税制を有することが決定された。「返還後50年間政治体制を変更しない」ことを認める「一国二制度」(英語: One

country, Two systems) の枠組みの中で、香港人は 2016 年現在も引き続き広東語と繁体字表記の使用が可能になっている。

香港人の言語事情について特記すべきことは 2 つがある。1 つは、中国本土で標準語として使われている普通話 (Putonghua、日本語訳: 北京語) は、返還前と返還後の香港においても、日常コミュニケーションを図るための共通語として使われていないことである。表 2 でまとめた香港の国勢調査の結果からわかるように、北京語を通常言語として使用する香港市民の割合は常にわずか 1% に過ぎない。また、近年中国本土との貿易 (いわゆる「チャイナ・トレード」、China trade) と観光業の追い風で北京語に対する学習意欲の向上が窺えるものの (Kaplan & Baudauf, 2011)、北京語が話せると自己評価する香港市民の数は、2011 年現在でまだ半分以下となっていた。

表 2 5 歳以上の香港人の北京語使用状況

	1991	1996	2001	2006	2011
北京語を通常言語として使用する市民の割合	1.1%	1.1%	0.9%	0.9%	1.4%
北京語が話せると自己評価した市民の割合	16.9%	24.2%	33.3%	39.2%	46.5%

出典: 香港政府統計處

http://www.byccensus2006.gov.hk/FileManager/EN/Content_962/06bc_mainrpt_v1.pdf
(p. 44)

<http://www.census2011.gov.hk/en/press-release-summary-report.html>

もう 1 つ特記すべき香港人の言語事情は、事実上地元の共通語になっている広東語が計画的に策定された書き言葉を持っていない点である。ダイグロシア (Ferguson, 1964) の概念を援用すれば、広東語が Low 変種としてとらえられている背景と直接に関係していることがわかる。

周知のように、四書五経 (例、論語、春秋、詩経) をはじめとする中国語の古典に使われている文章語「文言文」(日本での漢文に相当) は、昔から中国社会の中で最も上層の変種 (High 変種) の地位を維持している。その

ため、広東語を含むすべての方言は低層の変種としてとらえられており、文字表記は文言文に限られて発展してきた。この状況は実に20世紀の初頭に行われた「白話文運動」¹¹⁾まで2000年近く続いてきた。「白話」とは北京方言に基づいた話し言葉のことで、それに基づいて書かれた文章は「白話文」と呼ばれる。1910年代から胡適や、魯迅などの知識人の文学革命により、白話文の文学作品が徐々に普及し、その文体はやがて現在標準語として世界中の中国人の書き言葉におけるリンガフランカとして使われている「現代漢語」¹²⁾の規範となった。

香港では、中国への返還後も、以上のような「文言文」と「現代漢語」の教育が続いているのだが、発音も語彙も文法も北京方言と大きく異なる香港の広東語話者にとっては、それらの中国語の書き言葉を勉強しても(教室では広東語読みで授業が行われるのが主流)、普通話(北京語)の習得につながらないだけでなく、深刻な言文不一致の言語生活を余儀なくされる。広東語の表記体系を開発する言語政策がないため、香港人は日常生活で使っている口語の広東語を文字で記録するために、標準中国語用の常用漢字を借りて書くか、当て字を使うか、非標準の漢字を使うか、または広東語で書くこと自体をあきらめるかなど、さまざまな工夫をしなければならないことになっている。

千島(2007)などで詳しく紹介されているように、広東語についての研究は中国本土以外に、香港、アメリカ、日本、シンガポールなどでも行われている。筆者がオーストラリアで別なフィールドワークを行った際にインタビューに応じてくれた香港系移民一世の K. Y. Lau 氏は1999年に「Cantonese Phrasebook」を出版したほか、最近地元の広東語コミュニティで自らまとめた「広東語語彙」の資料を使って講演したという。

それらの文献資料を見ると、香港の広東語が現代漢語に用いられている常用漢字ではすべてを表現できない理由として次のようなことが考えられる。

- (1) 現代漢語になく、広東語独自の語彙がある。

例: [gamtsau]: 広東語表記「咁就」(日本語の意味: そうしたら)
(記載方法は以下同様)

- (2) 中国南部少数言語からの借用語、または影響された語彙がある。
例: [mit]: 「搵」または「mit」(ちぎりとる) [榕江俚語から]
- (3) 古代漢語にある文章語、死語が残っている。
例: [koey]、 「渠」または「佢」(かれ)
- (4) 広東語読みに基づいた外来語の語彙が多く生まれた。
例: [soetsaam]、 「恤衫」(ワイシャツ)
- (5) 広東語の変調などでできた新語・流行語。
例: [he]、 「hee」または「迤」(時間つぶし)

「香港特別行政区基本法」に戻ると、第9条に「中文」以外に「英文」も行政の公用語であると規定されている。返還前の「英文」「中文」と逆の順になったのだが、依然として正式文書として使われる中国語と英語が規定の対象となっており、話し言葉の広東語とは無縁である。事実上香港人の言語生活が広東語に基づいている以上、少なくとも教育現場においては、広東語を含む具体的な言語政策が不可欠であることは明らかであろう。そこで、返還後の香港政府は「両文三語」(英語: Bi-literacy and Trilingualism) という言語政策を打ち出し、書き言葉としては中国語と英語(「両文」)、話し言葉としては広東語、北京語(普通話)と英語(「三語」)の教育を推進することになった。香港地下鉄の車内放送を例にすると、以下のようなになる。

例2: 「両文三語」の実践例

広東語放送: [tsing] [mat] [kaaugan] [tse] [mun] (表記なし)

北京語放送: qing buyao kaojin chemen (中文表記: 「請不要靠近車門。」)

英語放送: /plɪːz/ /st'ænd/ /bæk/ /fr'ɔm/ /ə/ /dɔrz/ (英文表記: Please stand back from the doors.)

ここで興味深いのは、広東語放送の「[tsing] [mat] [kaaugan] [tse] [mun]」は常用漢字で「請勿靠近車門。」のように書くことができるのだが、「勿」(日本語訳: しないで)は文言文の表現で古風であり、日常的には使われていない。「勿」の代わりに北京語話者は「buyao」(不要)を使い、広東語話者は「mhou」を使っている。しかし、「mhou」にあたる常用漢字

は存在しないために「唔好」の当て字を使わざるを得ないので、正式文書の「中文」としては認められない。広東語の深刻な言文不一致の末、「三文」にしたいところが「両文」に留まったわけだ。

以上の言語事情を踏まえて考えてみると、香港人の抱えている言語問題は少なくとも以下のような側面があることがわかる。

- (1) 自分の話し言葉をすべて文字で記録することができない。
- (2) 言語政策の対象になっている「中文」を習得しても、そこに書かれている正式文書を北京語で読んだり、北京語話者とコミュニケーションしたりすることが困難である。
- (3) 学校教育を通してきちんと「中文」を学習しなければ文字からの情報が得られない。
- (4) 識字率は中国本土より低い。

次章では、オーストラリアに移住した香港人家族のケーススタディを通して、彼らの多文化社会における言語使用の実態と言語問題の一面を紹介したいと思う。

5. 事例紹介

5.1. 調査の概要

本研究のデータは、香港の移民ブームがはじまった1980年代半ばにオーストラリアに留学し、その後移住することを選択した広東語母語話者のF(男性、当時20代後半)を軸に、1990年代のはじめにオーストラリアで生まれた彼の子供S(男性)、そして、1990年代の半ばに呼び寄せでオーストラリアに移住した彼の親G(男性、当時70歳前後)の三世を対象に、計3回の現地調査を行ったものである(2013年1月、2015年2月、2015年8月)。移動による言語管理の軌道を考察するために、コンテキスト重視のエスノグラフィーの方法論に基づき、半構造化インタビュー¹³⁾、および言語バイオグラフィー調査¹⁴⁾を実施した。インタビュー後、収録した広東語の録音データを文字化し、さらに日本語に翻訳した。補助データとして、

多文化社会への移住による広東語話者の言語管理

研究者は調査対象者の自宅で開かれたホームパーティーと週末の飲茶の集まりに参加して、参与観察も行った。

各調査対象者のプロフィールは表3にまとめた通りである。

表3 調査対象者のプロフィール (2015年調査の時点)

		祖父世代 (G)	父親世代 (F)	子供世代 (S)
年齢		90代	50代	20代
性別		男	男	男
出生地		中国広東省	香港	オーストラリア
職業		退職	地元会社専門職	大学生
配偶者		香港人(同居)	香港人(同居)	未婚
オーストラリア 滞在歴		約20年	約30年	約20年
「両文」 能力	中文	可(繁体字)	母語(繁体字) 中上級(簡体字)	ほとんどゼロ(繁体字 簡体字の学習歴有)
	英文	ほとんどゼロ	上級	母語
「三語」 能力	広東語	母語、家庭言語	母語、家庭言語	家庭言語
	北京語	ゼロ	上級	ほとんどゼロ
	英語	職業に関する専門 用語、生活上単語 レベル	上級	母語
ドイツ語		—	—	初級(小学校LOTE)
イタリア語		—	—	初級(中学校LOTE)

以下、父親世代のF、祖父世代のG、子供世代のSの順で、それぞれの言語バイオグラフィーと言語管理の特徴を考察していく。

5.2. 父親世代(F)の事例分析と考察

Fは大学まで香港で正規の教育を受けた。生活言語及び家庭言語の広東語に加え、学校での「中文」教育を通して、繁体字による標準中国語を母語として使用することができる。しかし、前述したように広東語の言文不一致のため、Fによるとオーストラリアへの移住前まで、北京語は多少理解できるがほとんど話したことがないし、簡体字に対しても距離を感じていたという。英語に関しては、英語を媒介語として使う「英文中学」¹⁵⁾に7年間通っており、優秀な成績を修めたFは、オーストラリアに移住する前からかなり高い能力を持っていた。

Fはオーストラリアの大学院に入学した後、英語で研究したり、論文を書いたりするのにさらに高度な読み書き能力が求められるようになったが、香港で受けた英語教育の延長線で工夫し、無事学位を取得して帰国した。彼によると、最初に深刻な言語問題に直面したのは帰国してから3年後にオーストラリアに移住することを決断し、オーストラリアの地元の企業に就職した時だった。若い新入社員の彼は、特に会議の議事録を任せられることが多く、当時、会議に使う専門用語も議事録というジャンルについての知識もまったくなかったため、戸惑っていたという。幸いに、直属の上司は大変面倒見がよく、会議の録音を許してくれたうえ、議事録案の英語チェックまでしてくれて助かったと振り返った。Fは移住したあとしばらくの間その上司の添削した資料を英語の教材のように読み直したりしていたが、次第に上司の添削箇所が少なくなり、自信がついたという。調査の際に、Fは自宅の机にずっと保管されている当時の議事録の資料を研究者に見せた。それを見ながら、Fは「だからあの方をととても尊敬している。とても助けてくれたし、その後の仕事がうまく行ったのも、あの一年間の面倒を見てくれたからこそだと思う」とオーストラリア社会とのつながりの第一歩を自己分析した。

Fが職場で直面したもう1つの言語問題は生活英語だった。休憩時間を重視するオーストラリア人は一日数回飲み物を手にして休憩室で雑談をする「コーヒブレイク」の習慣がある。しかし、Fにとっては「みんなの話題であるワインとかは私の文化のものじゃないから、これはまさに壁の

こと、もちろん私はなるべく合わせるようにしてたけど、向こうは地元だから、話せることがない時は本当に詰まっていた」ことが多く、休憩どころではなかった。たとえば、一度雑談をした時にお年寄りのことを敬意を込めたつもりで「old people」の言葉を使ったところ、オーストラリアの同僚に「言わないでよ、みんないずれ年取るから…」と予想外の激しきで反発されたという。Fによると、コーヒブレイクだけではなく、職場関係のパーティーなどの社交の場では、話題があまり共有できないし、言葉にも気を付けなければならないので、徐々に敬遠するようになったそうだ。このことについて、周囲のオーストラリア人の同僚は自分が移民であることについて理解があり、特に気にしていなかったとFは補足した。

順調に英語能力が伸びていったFには実は別な言語問題が待ち伏せていた。英語のできる中国人と言うことで、アジア地域、とりわけ中国本土にある取引先との交渉役として、Fはオーストラリア側の代表の1人選ばれたのだ。仕事のために、年に平均6カ月以上出張しなければならず、ここではオーストラリアで経験してきた英語よりも、もっと複雑な言語問題が浮上したという。Fはインタビューで次のように心境を明かした。

例3 (中国出張の際についての語り)

F: 「だからある程度英語力があれば基本的にこなせるはず、彼らはだいたい大目に見てくれます [はい] だから、だいたい comfortable。一定の英語レベルがあれば大丈夫です。だけど、私は中国に行ったら、状況がとて複雑になります。北京語は私にとって native ではなくて、やはり第二言語。英語と比べても、やはり、われわれ広東語話者にとって北京語の発音はネイティブと違ったところがあるから [はい] だから、北京語で授業をする時には、意外と二種類のケースが起きます。一つは大目に見てくれるので [ええ] 大丈夫で、オーストラリアの状況と似ています。もう一つはとて反感を持たれる場合です。[はい] 授業が終了するときにアンケート調査をするんですが、こういうコメントが少数派だけどでできます [ええ] あなたの中国語がダメだ、ちゃんと話せる先生に代えてもらえる? と言う人がいたり [ええ] 中国語をちゃんと練習してから来なさい と言う人がいたり

して、彼らの愛国感情はすごく強くて[うん]だからわれわれのような華僑とか、中国語の話せない人とかに対して中国に帰ることにきびしいわけです。」

ここで明らかになっているように、Fはオーストラリアでは移民として受け入れられて、地元のオーストラリア人の理解があると評価している。一方で、オーストラリア移民として中国本土に出張する際に、まれなケースではあるが、流暢な北京語が話せる人と期待され、違和感を覚えるという。ただし、彼があとで追加説明したように、広東省に出張するときだけは緊張感がだいぶ和らぐそうだ。なぜなら広東省の会議も一般的に共通語の北京語で行われるが、みな広東語訛りの北京語に慣れているだけではなく、いったん公式の場から離れると広東語に切り替えることが多い理由による。最近では、Fは長年の中国への出張を通して、北京語能力も飛躍的に向上し、簡体字の文書にも慣れるようになったそうだ。以下の例7では、Fが北京語で話す際に、どのように問題解決を図ろうとしているかを管見することができる。

例4(北京語の言語問題についての語り)

F: 「広東語にも漢字を使うことがあるけど、私には北京語で言えないことがあります。そのときは一生懸命別な単語を探して、代わりに使うしかないわけです[ええ] 英語で話す時もこういう状況はあるけど[ええ] 英語の場合はもう慣れているから、すぐ別な言葉で言いたいことを説明することができますよ。でも中国語の場合だと、もともと広東語だったら知っていることだから、たとえば四字熟語などは逆に邪魔になるんですね[笑] たとえば「破釜沉舟」を言いたかったら…もう game over [game over] 読めない…でも[使いたい] そう! 英語だったらすぐ出るけど、たとえば、determine とかで言ったり、この場合は英語からいったん北京語に翻訳して、その意味を説明することで問題解決をしようと思いますが[ええ] だからその過程は結構複雑なんですね。」

Fにとって英語は外国語学習の目標言語だったため、言い換えや説明など、多くのコミュニケーション・ストラテジーを持っている。逆に母語である広東語では、英語のようにメタ言語的な処理をほとんど経験していない。そのうえ、母語だからこそ難しい表現をたくさん知っているし使いたくなる。したがって、広東語と同じ中国語の変種とされる北京語で話すときには、特に四字熟語や古典からの引用はかえって邪魔になって、それらを解決するのに「広東語⇒英訳⇒北京語訳⇒北京語で説明」という複雑なプロセスになってしまうわけだ。

私生活に関しては、上で紹介したように、Fの配偶者も香港出身であるため、家庭内でも、中華街などの地元華僑との交流などでも基本的に続けて広東語を使うことができ、移民として大変便利だという。このような言語生活は移住当初から子供Sが就学するまでしばらく続いていたのだが、LOTE教育を徹底するオーストラリア香港系移民ならではの悩みを抱えていたようだ。なぜなら、広東語話者の言文不一致の問題の上、オーストラリアでのLOTE中国語教育は香港の「三文両語」スタイルではなく、中国本土の基準に基づいているからだ。Fと配偶者の教育方針は直接に子供Sの言語使用と言語問題に反映され、後程の5.4節で詳しく考察することとする。

Fの言語管理の特徴は次のようにまとめることができる。

- (1) 英語の管理：移住時にかなり高度な英語能力を持っていたが、アカデミック英語に偏り、仕事用の英語や、同僚との雑談に必要な会話力と話題が不足していることに気づかされた（逸脱の留意）。しかし、自らの努力と同僚からの協力と理解で徐々に問題解決し、英語の非母語話者としてオーストラリアの多文化社会で心地よく（comfortable）生活を送ることができた（評価と調整）。
- (2) 広東語の管理：家庭言語、コミュニティ言語として使用することができ、移民として便利だと思った（肯定的な評価）。
- (3) 北京語の管理：オーストラリアの会社の代表として中国人との交渉する際に言語選択ではなく、如何に自分の下手な北京語を改善し交渉できるようにするかが深刻な問題だと捉えた（評価と調整の

計画)。また、子供の言語教育に関して、LOTE 中国語の学校に入学させるかどうかなどに悩まされていた(逸脱の留意と評価)。

- (4) 簡体字・繁体字の管理:繁体字の教育を受けてきたが、中国への出張を通して簡体字も慣れるようになった(調整の実施)。

5.3. 祖父世代(G)の事例分析と考察

広東省で生まれたGは共産党に対する不安が原因で第二次世界大戦後に多くの地元の人々と同じように香港に移住することにした。Gは中学校まで教育を受けており、繁体字による読み書き能力を一応持っている。香港でも故郷と同じように広東語で日常生活を送っていたが、結婚して事態が一転した。実は家族を養うために比較的安定した収入の得られるタンカーの技術者になり、定年までほとんどの人生を船で過ごすことになったのだ。Gによると、タンカーには香港出身の広東語話者がいるものの、フィリピン人をはじめとするさまざまな外国人がいて、仕事のために必要最低限の英語を覚えざるを得なかった。2015年8月調査の際に、高齢のGは耳が遠く、記憶力もだいぶ落ちてきたようだが、久しぶりに飲茶レストランに出かけたからか、ご家族にヒントをもらいながら、少しずつ昔のタンカーの生活を思い出して語ってくれた。まず、タンカーの中でよく使うsmoke roomやboiler roomがあることがわかった。また機械関係のscrewやjackなども少しずつ思い出した。所属のタンカー会社はほぼ決まった埠頭に着岸していたため、自分の香港旅券が認められるところなら港に出て、わずかな英語のピジンや日本語の単語を駆使し、現地の人と物々交換をしたり、飲食したりしていたという。Gによると、タンカーでは暇があっても、たばこを吸うか、トランプをするかで時間をつぶし、ほとんど言葉のいらぬ生活を送っていたようだ。

Gは引退してから香港にもどり約半世紀ぶりに家族と同居し始めた。ようやく落ち着いた矢先に、息子のFから、家族でオーストラリアに移民してはどうかという話が持ち込まれた。当初は「言葉が通じないから」との理由で移民申請を拒否していたが、最終的に説得されて90年代の半ばごろ移住し、その後ほとんど帰国をせず、20年間オーストラリアで過ごすこ

とになった¹⁶⁾。

移民した直後の G は、妻と一緒に息子 F の家族と同居していたが、その後妻と 2 人で近くに新居を構えた。G の自宅は多くの呼び寄せ香港系移民と同じように、香港のテレビ・チャンネルが見られるような環境が整っており、香港のドラマや、香港ニュース、または TVB オーストラリアを通して地元ニュースを広東語で視聴することができる。しかし G は近年耳が遠いためあまり利用していないという。G にとって一番の楽しみは毎週末の家族との飲茶の時間である。ゆっくり時間をかけて、「星島日報」のオーストラリア版を読みながら点心を食べることは、単に香港生活の延長というだけではなく、周囲の人々の様子を観察したり、新聞記事について話し合ったりすることができるので、移民としてオーストラリア社会に触れる機会にもなっていると言えよう。飲茶の後は時々近所にある中国食品店へ買い物に行き、たまに広東語のできる中国人、ベトナム人の店員と話すこともあるそうだ。

移民後、G はおおむね広東語での生活を維持することができているのだが、F によると、父親は母親と違ってオーストラリアでの生活が長くなってきても、友達と呼べる人は一人もおらず、ソーシャル・ネットワークは完全に家族に限られているという。幸か不幸か、G はタンカーでの寡黙な生活が長かったので、オーストラリアに移住してからはガーデニングと日曜大工の趣味を見つけ、ほとんど言葉に頼らない生活を送っても特に不満がないという。しかし、最近では、そんな G も言語問題に直面しているという。たとえば、

- (1) 飲茶レストランの入り口によくおいてある無料の新聞と広告誌はだんだん簡体字のものが増えてきて、あまり読む気がしない。
- (2) 飲茶レストランでは、正しく点心の名前を広東語で発音できない北京語話者のウエイトレスが増えてきて、気になっている。
- (3) 去年から体調を崩し入院した際に、病院は「中国語対応」となっているものの、看護婦も北京語話者のみで、書類もすべて簡体字になっていた。幸いに少し広東語のできるマレーシア出身とベトナム出身の看護婦がいて、何とか頼むことができていた。

息子のFによると、実は兄弟の配偶者の中に中国本土出身の北京語話者がいるのだが、Gは北京語ができないため、ほとんど言葉で交流したことがないそうだ。オーストラリア社会における中国本土出身者の増加により、広東語単一言語話者のGは自分の言語生活が脅かされつつあることに気づいているのが、移住したのは中国ではなく、オーストラリアである以上、北京語を気にする必要はないと自らの方針を決めたという。

以上の分析からGの言語管理の特徴をまとめてみよう。

- (1) 英語の管理: 英語ができないことで最初はオーストラリアへの移住に抵抗があった(逸脱の留意と否定的な評価)。移住した後、香港での言語生活の延長上に移民生活を送ろうとしていたため(調整の計画)、結果として、家族に頼り切ることになり、生活圏が狭くなった(調整の実施)。
- (2) 広東語の管理: 唯一できる広東語は家庭言語以外に、コミュニティ言語としても使えていたので、移民として地元社会とのつながりが一応持てた。しかし、広東語の使える範囲が狭くなってきたことに気づき、無言語生活になりつつあった(逸脱の留意と調整の実施)。
- (3) 北京語の管理: オーストラリア到北京語話者の親戚がいるのだが、ほとんどコミュニケーションをしたことがない(逸脱の留意と調整の実施)。移民生活の中で(飲茶レストランと病院など)だんだん北京語での対応しか受けられなくなってきたことに違和感を覚える(逸脱の留意と評価)。しかし、英語圏のオーストラリアに移住した以上、北京語に悩まれる必要がないと思った(調整の計画)。
- (4) 簡体字・繁体字の管理: 使い慣れていない簡体字の新聞を読む気がしない(逸脱の留意と評価)。

5.4. 子供世代(S)の事例分析と考察

一人っ子のSは現地校に通いながら、5歳から毎週の土曜日に「Saturday school」(土曜校)と言われる移民コミュニティの言語補習校に通い始めた。自宅の近くにある香港人運営の補習校だった。学校では、香港の教育制度に習い、媒介語の広東語で、繁体字と標準中国語の読み書きを教えて

いた。教育内容だけではなく、香港式の詰め込み教育も徹底しようとしていたようだ。Sは「學校」や、「戲院」や、「遊泳」などの難しい漢字の練習や、それらの単語を使うための作句、作文の宿題に圧倒され、毎週一回とはいえ、いつも泣きながら通っていたという。母親の完全なサポートがあったものの、家庭言語の広東語と学習言語の標準中国語とのギャップがあまりに大きい上、厳しいカリキュラムに追い込まれていたことで、結局わずか2年間で別な補習校に転校することになった。新しい学校では、台湾人の先生が繁体字ではなく、簡体字を教えていたので、漢字の練習は確かに少し楽になった。しかし、媒介語是北京語であるため、言文一致とはいえ、Sにとっては全くの外国語のように感じ、ますます学習目的が見えなくなったという。にもかかわらず、両親のサポートを得ながら、Sは小学校卒業まで、5年間この補習校に通った。

中学校に進学したSは両親の強い要望の下、引き続き中国語の補習校に通うことにした。ただし、読み書き能力がかなり遅れていたため、以前通っていた学校から、コミュニケーション中心の中国語会話教室に再度転校した。経営者は中国系マレーシア人で、漢字の読み書き、読解、作文などの伝統的な学習ではなく、ビデオや、歌、ゲームなどを通してアクティビティー中心のレッスンだった。負担がだいぶ減ったおかげで、Sは授業を休むことがなくなり、多くの移民の子供たちと同じように大学受験準備の10年生(16歳)まで中国語学習を全うした。

合計11年も中国語の補習校に通ったSは2013年(当時18歳)の調査の際に次のように自分の中国語学習の歩みを振り返った。

例5(自らの言語学習についての振り返り報告、原文は英語、著者訳)

S: 長い間マンダリンを習っていました。かなり早い時期に始めたけど16歳になったときに止めました。中国語の学校で文章を読んだり、書いたり、声を出して発音を練習したり、またCDを聞いてその質問に答えたりしたし、一日中、中国語で話していました。広東語の方は、だいたい両親との会話から覚えました。だから、読んだり書いたりするときはマンダリンしかできないし(漢字を読もうとするときに必ず広東語ではなくマンダリンが頭に出てくる)、学校で習っていた簡体字

の方にとても親しみを持っています。だけど、自分の持っている中国語の知識はそんなに役に立っていないと思っています。思いつく唯一の例は、「出」のような本当に簡単な漢字が読めるということだけど、だいたい私の行くところは英訳もついているから、知っていてもあまり役に立つと思わないんです。聞き取りの方が読み書きよりもっとできるし、役に立つことがあると思います。というのは、オーストラリアでも、マンダリンしか話さない人がたくさんいるから。たとえば、ある時、駅で Myki カードの使い方について聞かれて、その人のマンダリンは半分ぐらいわかったので、頑張って短い文とジェスチャーで教えてあげたことがあります。

Sにとって実は家庭言語の広東語と土曜校の中国語(彼のいう「マンダリン」)以外に、小学校でドイツ語を7年間、高校でイタリア語を3年間習ったことがある。いずれもオーストラリア初中等教育のLOTEという必修外国語教育の教科だった。「なぜLOTE中国語の開設された学校に入らなかったのか」との質問に対して、Sは「中国語を教える学校はあるのだが、マンダリンしか教えない。うちでは広東語しか使わないので、親が最初から断念した」と状況を説明した。結局、Sはドイツ語もイタリア語もほとんど数字とあいさつしか覚えていないという。調査の最後に、Sは「新しい言葉を勉強するのは、難しいし、もともと興味がないから、あまり好きじゃないんです」と自分の言語学習について分析した。

Sは以上の言語学習経験を経て、2015年現在は引き続き家庭の中では、親や、広東語のできる親戚や友人と広東語を使っている。家でよく流れているTVBオーストラリア・チャンネルの番組は聞こえているが、知っている単語が限られているため(例、「英国」という広東語は知っているが、「ある国」と理解し、「Britain」と連想できない)、ほとんど注意して聞いていないようだ。定期購読の香港雑誌も新聞も読めないという。また、家の中に飾ってある中国語の掛け軸や装飾品は中国文化だとは考えているが、内容は全く分からないようだ。

家庭外ではSの言語使用はほとんどすべて英語になっている。ただし、

同じ香港系移民 2 世の友達とは広東語を使っている。一方で、周りに北京語話者が多数いるものの、友達になろうと考えたことがないという。中国本土からの友達は 1 人いるのだが、その人は広東語ができるから、付き合いことにしたそう。大学での新移民のバングラデシュ人のチューターの英語の発音が強いアクセントがあるため、学生たちは内容が聞き取れず、困ることが多いそう。たとえば、「agents」の単語はほとんどの学生は「Asians」に聞こえてしまう。先生本人が気づかず訂正が少ない。

S の言語管理の特徴は次のように考えることができる。

- (1) 英語の管理：現地校に通い、英語を母語として使っている S は、大学に入ってから非英語母語話者の教員の英語の発音に慣れておらず、困ることがある（逸脱の留意、否定的な評価）。しかし、オーストラリアに自分の言葉しかできない人がたくさんいることを理解し、自分のできることは助けようとする（調整の計画）。
- (2) 広東語の管理：広東語ができて、自分の土曜校の中国語学習に役に立たないし、香港人向けのテレビ番組や雑誌の理解にもつながらないことが成長するにつれてわかってきた。にもかかわらず、広東語話者として、オーストラリア社会の広東語コミュニティに親しみを持っており、出身を問わず友達を作ることができる（逸脱の留意と調整の実施）。
- (3) 北京語の管理：土曜校での勉強を通して、北京語で多少コミュニケーションができるのだが、オーストラリアにいる北京語話者との距離を感じ、友達を作らない（調整の計画と実施）。
- (4) 簡体字・繁体字の管理：漢字学習に対して最初から苦労していた。繁体字より簡体字の方が少し楽に感じたが、いずれもオーストラリア人の自分にとって必要性がないと思っている（否定的な評価）。

6. まとめ

地球上には言語学的・社会言語学的に非標準とされる言語変種や、政治的・歴史的に言語としてのステータスが確立されていない言葉が何千と存在している。ますます拡大して多様化していく多文化社会では（Vertovec,

2007)、特に言語政策の策定にあたって、その事実を無視することができないだろう。

香港出身の移民の場合、幸か不幸かオーストラリアと同じイギリスの植民地であったという横のつながりで、オーストラリアには1901年にイギリスから独立する前から「Hong Kong Born」(香港生まれ)というグループの入国記録が残されていた。さらに初回の国勢調査から「香港生まれ」「広東語」の項目が採用されていた。「香港人」としてオーストラリア社会に承認されているということは、父親世代のFが英語が完璧ではなくても、移民として居心地よく生活できるという証言にもつながっていると思われる。このようにオーストラリアの中国系 old comer は広東語話者が多く、1990年代からは香港系移民コミュニティも確実に形成されてきたにもかかわらず、LOTE教育のkey languagesの1つとして位置付けられているのは中国本土の中国語であり、広東語話者の継承語教育についても全く対応されていないというのが現実である。オーストラリア政府のLOTE言語に対する席次計画の方針は必ずしも移民の移住状況を反映していないことが窺える。

本研究では、三世代のオーストラリア香港系移民家族の事例を取り上げ、(1)移住後の実態、(2)移住前の言語事情、さらに(3)個々の移民の言語バイオグラフィーに見られる言語管理、の3つの角度からボトムアップ式で彼らの直面した言語問題について考察した。その結果、「香港国=香港人=香港語」という近代のパラダイムから外れている香港系移民は、近年中国本土から移住する北京語話者の急増やLOTEの中国語施策などの事情に左右され、英語圏に移住したはずだったにもかかわらず、公用語の英語とコミュニティ言語である広東語よりも、北京語と簡体字の管理を強いられていることが明らかになった。

今後は、組織言語管理や承認セオリー(Recognition theory, e.g. Taylor 1992)などの視点を加えて、非英語圏(例、日本)の香港系移民と比較しながら、さらに研究を進めていきたい。

注

- 1) 例、オーストラリアでは、1973年の白豪主義の放棄や、1975年の人種差別禁止法 (Racial Discrimination Act 1975) の制定などを通して多文化主義政策が本格的に始まった。
- 2) オーストラリアの多文化政策の一環としては LOTE (Languages other than English) 教育を推進してきた。
- 3) 松田 (1994) などが詳しい。
- 4) 19世紀末金が発見されたビクトリア州西部にあるバララットという町に出稼ぎに行った中国人の多くは中国広東省の四邑地域 (新会、台山、開平、恩平の4つの市による地域) 出身とされている (参照: <http://www.ausemade.com.au/vic/destination/b/ballarat/ballarat-chinese.htm>)
- 5) 例、駐香港オーストラリア総領事館 (Australian Consulate General, Hong Kong) の資料によると、1980の後半に入り、移民申請の件数が急増し、1989年度の14,029件、1990年度の11,414件でピークをマークし、市民の不安が伺える (参照: Chan & Postiglione 2016)。
- 6) 同じ規模の移民グループは韓国 (74,538)、レバノン (76,451)、オランダ (76,047) とアメリカ (77,010) がある (Commonwealth of Australia, 2014)。
- 7) 2016年5月21日現在のオーストラリアの人口 (24,080,190人) である (Australia Bureau of Statistics: Population Clock による)。
- 8) 「該当外」 (Not applicable) (20,855) を除くと、専門職 (3,966)、行政職 (1,330)、一般事務職 (3,339) であった (Museum Victoria Australia, Origins: Immigrant Communities in Victoria)。
- 9) 中華人民共和国が制定した漢語拼音方案によるローマ字の表記体系である。本稿では声調の記載を省略する。
- 10) 本稿ではすべての広東語ローマ字表記は国際音標注音 (IPA) を採用している。また声調の記載を省略する。
- 11) 「新文学運動」、「文学革命」とも呼ばれる。
- 12) 「現代漢語」は中華人民共和国、中華民国 (台湾) はじめ、シンガポール、香港、マカオ、海外の中国人が標準の言語として使い、共通理解を図る。簡体字と繁体字で表記することができる。
- 13) 村岡 (2001) の紹介が詳しい。本研究では対面の一対一のインタビューと、2名ずつのインタビューの2種類の半構造化インタビューを行った。すべてのインタビューの使用言語は広東語だった。
- 14) 言語バイオグラフィーとは調査対象者のライフストーリーの語りから現在の言語使用に至った経緯を探って分析する手法である (Denzin, 1989; Nekvapil, 2003 など参照)。
- 15) 当時香港の中学はほとんど中高一貫校だった。英文中学では中文と中国歴史

の科目を除いて、すべての科目は英語で教えていた。

16) 残念ながらGは2016年のはじめに永眠した。本稿をGに捧げたい。

参考文献

- 千島英一(2007)『香港広東語の研究: 語彙と言語文化を中心に』金沢大学大学院人間社会環境研究科博士論文
- 松田陽子(1994)「オーストラリアの言語政策における多文化主義と言語教育問題」『オーストラリア研究』5号、66-79頁
- 村岡英裕(2001)「質問調査: インタビューとアンケート」J. V. ネウストブニー・宮崎里司共編著『言語研究の方法』くろしお出版
- Burnley, I. (1999) Levels of immigrant residential concentration in Sydney and their relationship with disadvantage. *Urban Studies*. 36 (8), pp. 1295-1315.
- Chan, M. K. & G. A. Postiglione (eds.) (2016) *The Hong Kong Reader: Passage to Chinese Sovereignty*. Routledge.
- Chiswick, B., Y. L. Lee & P. W. Miller. (2004) Immigrants' language skills: The Australian experience in a longitudinal survey. *International Migration Review*. 38 (2), pp. 611-654.
- Clyne, M. (ed.) (1985) Australia, Meeting Place of Languages. *Pacific Linguistics*. ANU Canberra.
- Clyne, M. (1991) *Community Languages: The Australian Experience*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Commonwealth of Australia (2014) *The People of Australia: Statistics from the 2011 Census*. Australian Government: Department of Immigration and Border Protection.
- Dawkins, J. (1990) *The Language of Australia: Discussion Paper on an Australian Literacy and Policy for the 1990s*. Department of Employment, Education and Training, AGPS.
- de Bot, K., & M. Clyne. (1994) A 16-year longitudinal study of language attrition in Dutch immigrants in Australia. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 15 (1), pp. 17-28.
- Denzin, N. (1989) *Interpretive Biography*. Newbury Park, London, New Delhi: Sage Publications.
- Ferguson, C. (1964) Diglossia. In D. Hymes (ed.), *Language in Culture and Society* (pp. 429-439). New York: Harper & Row.
- Jupp, J. (2001) *The Australian People: An Encyclopedia of the Nation, Its People and Their Origins*. Cambridge University Press.
- Kaplan, R. & B. Baldauf (eds.) (2011) *Language Planning in the Asia Pacific: Hong Kong, Timor-Leste and Sri Lanka*. London and New York: Routledge.

多文化社会への移住による広東語話者の言語管理

- Lau, K. Y. (1999) *Cantonese Phrasebook*. Hawthorn, Victoria, Australia: Lonely Planet.
- lo Bianco, J. (1987) *National Policy on Languages*. Commonwealth Department of Education. AGPS.
- Mar, P. (2002) *Accommodating Places: A Migrant Ethnography of Two Cities Hong Kong and Sydney*. Doctorate dissertation, University of Sydney.
- Marriott, H., J. V. Neustupný & R. Spence-Brown. (1994) *Unlocking Australia's Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia*. VoL.7 (Japanese), NLLIA.
- Nekvapil, J. (2003) Language biographies and management summaries: On the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language*, 162, pp. 63–83.
- Pe-Pua, R. C. and Australia Bureau of Immigration, Multicultural and Population Research. (1996). *Astronaut Families and Parachute Children: The Cycle of Migration between Hong Kong and Australia*. Canberra: Australian Government Publishing Service.
- Taylor, C. (1992) The politics of recognition. In A. Gutmann (ed.), *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition* (pp. 25–73) Princeton: Princeton University Press.
- Vertovec, S. (2007) *New Complexities of Cohesion in Britain: Super-diversity, Transnationalism and Civil-Integration*. Commission on Integration and Cohesion. Communities and Local Government Publications.
- Wong, S. L. (1994) Roaming Yuppies: Hong Kong Migration to Australia. *Asian and Pacific Migration Journal*, 3 (2–3), pp. 373–392.
- Yagmur, K. (2004) Language maintenance patterns of Turkish immigrant communities in Australia and western Europe: the impact of majority attitudes on ethnolinguistic vitality perceptions. *International Journal of the Sociology of Language*, 165, pp. 121–142.

インターネットサイト:

Australia Bureau of Statistics. Census.

<http://www.abs.gov.au/websitedbs/censushome.nsf/home/Census?opendocument&ref=topBar> (2016年9月1日閲覧)

Australian Government, Department of Social Services. Settlement and Multicultural Affairs.

<https://www.dss.gov.au/our-responsibilities/settlement-and-multicultural-affairs/programs-policy/a-multicultural-australia/programs-and-publications/community-information-summaries/the-hongkong-born-community> (2016年5月21日閲覧)

グローバル・コミュニケーション研究 第4号(特別号)(2016年)

Australian Social Trends (1994) Population Growth: Birthplaces of Australia's settlers.

<http://www.abs.gov.au/AUSSTATS/abs@.nsf/2f762f95845417aeca25706c00834efa/ea1fac740844f848ca2570ec0073cdf5!OpenDocument> (2016年5月21日閲覧)

Museum Victoria Australia. Origins: Immigrant communities in Victoria.

<http://museumvictoria.com.au/origins/history.aspx?pid=24> (2016年1月18日閲覧)